

山東京鶴の滑稽本『御室八十八ヶ所四国栗毛』

―翻刻とその版本および著者について― (上)

石 川 了

一、はじめに

十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』の影響は大きく、刊本・写本を問わず数々の追随作が生まれたことは、すでに尾崎久弥氏「膝栗毛物の研究」(同氏『江戸軟文学考異』〈中西書房、昭和三年〉所収)が指摘するところである。その尾崎久弥コレクション(名古屋市蓬左文庫蔵)中に、膝栗毛物の山東京鶴著『^御八十八ヶ所四国栗毛』(中本二巻二冊、刊本。以下、尾崎本と呼ぶ)が所蔵されており、従来はこの尾崎本以外に伝存本が知られていなかった。また管見の限りでは尾崎氏を含めて、この著作と作者に言及した論がない。

ところで、大妻女子大学にも同二巻二冊本(以下、大妻本と呼ぶ)があり、その版本(原則として、片面一丁彫りの両面彫り)四十四枚分をも所蔵する。照合してみると、尾崎本と大妻本は同版でともにその前篇(版本・版本ともに「前篇」の文字はない)に相当する。前篇分の所蔵版本は都合十九枚(三十八丁分)、欠いているのは版本の「序ノ一」「序ノ二」の二丁分一枚と、表面が「上ノ二十一丁」の一枚(裏面の内容は不明)、それに「下ノ一」「下ノ二」の二丁分一枚で、この都合三枚(六丁分)の版本がない。

右の十九枚を差し引いた残る版本二十五枚は、その後篇二巻二冊に

相当するものである。前篇二冊目末尾の御室三十九番目茶所で、「コレサおめへ(繁八を指す)がそのげびつ(飯櫃のこと)のふたをとつてはちをかいてしもふては。四国栗毛の二へん目の幕あきにねうちがねへはナ」と言う昌六のセリフや、「これより此げびつのふたをとりて。しげ八。はちかきしおかしみ。この茶所にて一宿の滑稽。さてまた五十三ばん。円明寺くさりのだんの晒落より。近江屋酒もりのだんなど。ことごとくおもしろみを穿ちて。後へんにいだし申候」といった記述は、確かにその後編(第二編)の予告である。しかし単なる予告にとどまって未刊に終わったのではなく、その版本が残っているのであるから、その版本は伝存本の所在が確認できないものの出版されていたに相違ない。

後編二巻二冊の版本丁付を示せば、「序ノ四」(オは序文でウは口絵、「上ノ二」(内題「四国栗毛後篇卷之上」)「上ノ廿四」(七ウ・八オ挿絵、十八ウ・十九オ挿絵)、丁付ナシ(オに尾題「四国栗毛卷之上終」、ウ半丁は無彫刻)、「下ノ一」(内題「四国栗毛後篇卷之下」、三ウ・四オの各上半分挿絵)「下ノ八」「下ノ十一」「下ノ廿三」(十一ウ・十二オ挿絵、十八ウ・十九オ挿絵、廿三オに尾題「四国栗毛卷之下大尾」、同ウから跋文)、「下ノ廿四了」(跋文)、丁付ナシ(これが収まる版本一枚については、片面はオウで計二十行分の野のみが彫られており、もう片面は無彫刻)である。欠けている丁は「序

山東京鶴の滑稽本『御室八十八ヶ所四国栗毛』

「三」までと、「下ノ九」「下ノ十」ということになる。

二、前篇翻刻

前篇が二部確認できたので、大妻本を底本として尾崎本を参照しつつその全文を翻刻する。

凡例

- 一、漢字は通行の字体に改めた。
- 一、片仮名表記のうち、副詞・感嘆詞・終助詞および意味のあるものはそのままとし、それ以外の「ミ」「ハ」「二」等は平仮名に改めた。
- 一、セリフの始まりを意味する記号「」はすべて、「」を代用した。
- 一、丁移りはその末尾に、丁付才または丁付ウの形で括弧内に示したが、行移りは無視した。
- 一、原本二行書きの部分については、左記の措置を施した。
ア、「上ノ十五才」に一箇所のみ句点「。」がある他は一切の句読点がないので、私に読点「、」を施した。
イ、「下ノ六才」における漢文は原本の一行目が繁八のでたらめな訓読文、同二行目が対応する原漢文となっているが、その一行目の末尾に二行目を「」内に翻字し、いずれも通常文字サイズで一行に組んだ。
- 一、誤刻・脱字と思われる箇所にはその右側に「(ママ)」と付したが、漢字に付されたルビおよびルビの付いた漢字そのものが誤刻の場合には当該漢字の下に、また二行書き部分の誤刻・脱字においては当該文字の下に、それぞれ「(ママ)」を付した。
- 一、版木に入木等手加えられている文字は、破線の四角で囲んだ。
- 一、原本に不適切な用語があるが、資料としてそのままとした。

御室四国久利毛 上 (尾崎本原題簽)

眉言朝貳暮四 (関防印)

周礼曰。我名をさしておれといへば。妾をさしてかれといひ。女房に向つてこれといへば。老年を誘てばれといふ。しやれ又何ぞはなれんや。といへり。嗚呼人と(序ノ一才)して。誰か洒落を好まざらん。雖然酒に下戸あり。洒落に野夫あり。余がごときの不通人。豈亦洒落をよくせんや。洒落は一言も吐けず。酒は半合も飲ず。下戸なり野夫なり無芸也。(序ノ一ウ)しやう事なしの山巡。御室八十八ヶ所の。洒落に似よりのてんごがき。書肆の需といひながら。いと恥しき事なりと。作者誤てをんしやれもふす

戯作者 山東京鶴印 (印文「澄／成」)(序ノ二才)

(口絵Ⅰ(序ノ二ウ・序ノ三才)・口絵Ⅱ(序ノ三ウ))

御室四国栗毛上之巻

山東京鶴 戯作

弓は提灯につき。鉄鉋はすへ風呂の中にかくるゝとは。むべなるかな。兜は蟹が名にのこり。鎧は海老が身にちやくす。四のそのなみをだやかに。をさまる御代のしるしとて。所々に神社の御造営あ(上ノ一才)れば方々に仏閣の御建立あり。そがなかにいとくゝとふときは。洛西御室山なる八十八ヶ所なり。靈験あらたにましまして。諸願ことごとく成就せざるはなく。現安後善の霊場ゆへ。老たるとなく若となく。八兵衛となく権介となく。さんけい日々にいやまして。その仏徳ぞありがたき。ころしも卯月のはじめつかた。ことさら(上ノ一ウ)ながめのにしの野辺。雲雀の空にさへづるは。姑に似て喧ましく。蛙の池になき出すは。赤子のごとくかまびすし。蛙の碎玉花の紅なるは。嫁子が春着のうらを欺むき。土手の土筆のしろくたけた



浮世画工
菱川師保筆

〔口絵Ⅱ（序ノ三ウ）〕



清晴事
菱川師保画

〔口絵Ⅰ（序ノ二ウ・序ノ三オ）〕



るは。娘子が懐中の白粉筆かとあやまたる。麦は青くして蒼海の波をなし。黄な花は黄なして黄金の山をつくるに。手を（上ノ二オ）むなしくしてあらんより。御室へさんけいせんものと。まかり出たる二人連昌六、これをもなまじいた風なれども、大小はさくず、刀に、繁八より少しあよりきたる昌「コレ繁公あまりはいじやねいか。日はながいにしづかにいきねへナ繁「ナニ駱駝のねり供養じやあろめへし。そんなにしづかにあゆめるものかトのをと、耳もとにてどんときこへる、二人はまことに驚き昌「繁（上ノ二ウ）公今のはなんだ。大そうな音だが。日がみなりか繁「なるほど目雷だかしきりに焰硝くさくなつた。おめへへそはあるか昌「イヤ臍はなくとも。へそのしたさへあらばいゝが。だいぶぢぢんだ繁「なるほどでへぶ。おめへの鼻のしただ。のびたはへ昌「べらぼうめ。へその下がぢぢこんだとして。はなのしただのびるも（上ノ三オ）〔挿絵①（上ノ三ウ・上ノ四オ）〕のか繁「イヤのびんともいへねへぜ。引こんだところがあれば。のびるところが有が。天地自然の道理だ昌「コノばんくるはせめ。人を石亀のやうにおもつてけつからトふとするひやうしに、たこの小へん繁八のあしへかゝると、繁八大にはらをたてやつきとなつて繁「このちくしやうめ。目はみへねいかトつきとなつて昌「百姓「ちくしやうとは（上ノ四ウ）なんのこつちや。おら百姓じやが繁「これややい。ちくせうと百姓とあまりのいた中でもねへはへ。てめへたちのやうに。稗の雑炊や麦めしくらつてゐる。すりこぎとはちがふぞよ。はばかりながら。拝みづきの米をくらつて。お膝もとでおそだなさつた。まぐれかくれのない江戸ッ子さまじや昌「おま（上ノ五オ）いがたが江戸ッ子じやとて。おらおそれるものか。サア畜生の垢ぬきしてもらをふかい。其うへ稗の雑炊くゐるとはどうした事じや。おらたちは牛や鶏にでも。そんなものは食しやせんぞよ繁「ヨ、うぬらがかつておきやがる。鶏や牛には稗の雑炊もすぎらア夫だから京近在の鶏は粉糖（ママ）くをふと啼やがるし。牛（上ノ五ウ）はひもじいと吼やがるはトむかふが百姓しやとおもふゆへ、あくまでの、しる折しも、こなのゆへ、びつくりしてにけ昌「アハ、ハ、ハ、これはおかしい。をまい江戸ッ

〔挿絵①（上ノ三ウ・上ノ四オ）〕



尾上梅幸
臍の背
に

つくや雉子
の
ゆくりなく

子ではないか。蛇ぐらいに恐れてにげるとは。ままよ小便かけたも
了簡しなせト　ゆへ昌六はこらへかね　〔昌〕「ヤイ百姓てめへはこの男の
筋目をしらぬゆへあなどらアこの男は世上に名高い。天竺徳兵衛の
末孫だは。それ（上ノ六オ）だからくちなはには恐れるのだ　〔昌〕「ハ
、、、これはおかしい。天竺徳兵衛の末孫じやによつて。今でもこ
の人は定めし天竺浪人じやあるト　しだいになぶりかけるゆへ、もはや
百姓了簡してやるは。だまつて立され　〔百姓〕「イヤ了簡はならんは
い。武士たるもの、足へむけ。小便かけたがあやまりなら。あやまり
にして。畜生の垢ぬきしても（上ノ六ウ）らをふかい　〔繁〕「そりやア
もつともだが。今さら畜生をいひ直して。けだものといった処がお
つなものだし。ヲ、そふだ。てめへは鳥るい　〔昌〕「いや鳥るいも

畜類も同じことじやは　〔繁〕「りくつは同じことだけれど。鳥類ばかり
はのがれんよ。なぜといつてみな。てめへは元来小便とりだはアハ
、、、ト　昌六とりあへず、
ほとゝぎすき、に北野、百姓が（上ノ七オ）

野にをくこへの小便かけたか
かく打興じつ。伊賀屋舗のわきを御前通へ出ると。こゝに延命寺
といへる地藏堂あり。このころの事ゆへ。せつたいといへる札をかけ
て。としのころ二十ばかりのいとうつくしき尼。茶をたいている　〔繁〕

「せつたいぜつめい一トやすみとはどふだ　〔昌〕「おさまらねへしやれ
だ（上ノ七ウ）せト　いひつゝ、こしを打ちかけ、茶をくんでのみ
へいくつになりなすへト　いへど、尼は唯　〔繁〕「モシ尼御前もう何どきだ
へ　〔昌〕「らん丸さんがきいてあきならア　〔繁〕「おどけなしにモウなんど
きだナト　かりなれば、二人はいよくこゝろがけ　〔繁〕「ちやの下がく
すばるなら。わつちが焚てあげやしよト　か、の尼のしりを一寸つめると、尼はわつと
（上ノ八オ）いふて彼方へとにげ入　〔昌〕「これおまいがたはあ、のつんぼの尼をつか
れば、内より六十斗りの尼立出て　〔昌〕「これおまいがたはあ、のつんぼの尼をつか
まへて。何をなさるのじやたわいもないト　互にかをみあはせ　〔昌〕「こりや
又きつい迷惑だ。なにもてんがふはせねわい。あ、の尼子のしりに蜂が
くつゝいていつたによつてもしやかみなどしたら気のどくじやと思つ
て。をとしてやつたがどうした　〔繁〕「わつちもあの尼子のほうべた
（上ノ八ウ）にやぶ蚊がくつゝいていつたから。ころしてやろうと思
つて。立よつたのだは　〔昌〕「きつひおせわじや。この寺内にてはたと
へのみ蚊にせよ。殺生はなりませんと　内へいる　〔昌〕「エ、ばんくるはせ
め　〔繁〕「くそがきいてあきならア　〔昌〕「こふもあろふか

我恋をかなへ給へといのらした

石できざみし地藏そんには（上ノ九オ）

是より兩人は。御前通を北へさし。たどりゆくに。むかふより二八
ばかりの娘こしもとを一人つれ。天神まいりのもどりとみへ。こな
たへと出来るを。兩人はちろりとみて　〔昌〕「ほんとにありがたいぜ
　〔繁〕「こしもとはいゝが。あしもとがすこしわるひ　〔昌〕「めもとに愛が

あつて。口もとにえくぼがあらアト（そめきかけると、かの娘はかを、あかくて、思ころよりのべがみ一枚い）「おつとあぶねい御意しづかにト（ふと（上ノ九ウ）て、こなたへとちる）」（この間）「なんと昌公うらやましいか。かたじけなくもこの御紙には。蘭の香気があるてナトみて、繁八は顔をしかめ」（繁）「ヤア〜大變だ〜。このにをひのわるいといふは。こりやたまらぬ〜」（昌）「アハ、〜、そりやまた繁公つけたは。今あの紙をひろふ事は。わつち（上ノ十オ）もよくしつてはいるけれど。かのかみがきたての犬のくその上へむけちつたから。しよ事なしに。みがしたのたは。それをごぞんじなくて。おめへはおころしづかにとことばをかわして。をひろひなすだのだアハ、〜、」（繁）「エ、こりやたまらぬ〜」。先には足に小便をかけられる。今はまたにくそのついたかみを持ちなり生ながら（上ノ十ウ）あしをくそと小便のあへものとは。どうよくだぜ」（昌）「おめへかなしく思ふも尤もだが。大かたそりや大師さまが繁八にはまいるなをつしやるのだあらう。おめへなんぞ大師さまのばちをかふるやうな事。した覚はねへか」（繁）「まてよヲ、そうだ。大師さまのおいかりをかふるおぼへなきにしもあらず。この十日ほど前（上ノ十一オ）」（挿絵②（上ノ十一ウ・上ノ十二オ））だつけ。六角通のみぞへむけ。小便をしやうとおもふた所が的がはづれてはからずも表具屋のかんばんに。小便をおつかけたは」（昌）「ナニおめへそりや弘法大師さまじやねへ。達磨大師さまだは」（繁）「ヲ、そうだつけ。表具屋のかんばんは達磨大師だ。しからばなんにも覚はねへてナ」（昌）「まづ何にしろう手足をあらひねせへト」（昌六のすゝめに（上ノ十二ウ）より、繁八はこなたの百せう家について）「モシおかみさん御面どうながら。足を一寸すゝがしてをくんねせへ」（女房）「おやすいこつちや。むかふの井戸はたに鹽があるさかい。それをおつかいなされ」（繁）「はい〜ありがたうト」（かの井戸はたのたらいにみつとして、水にうつる我かを、つく〜とみて、あしもあらはす靜をなしたり眉毛につば付たりなどして、うつぬかしているうちに、たらいのそこがめかると、繁八めからめ顔して）「みづたまらねは足もあらへず」（昌）「ヲヤ〜しやれどころ（上ノ十三オ）じやねへ。人さまの大事のたらいのそこをぬいで。早くわび事しねへか」（女房）「これこの人はけしからぬ」（繁）「けしがからけれや。生姜や



〔挿絵②（上ノ十一ウ・上ノ十二オ）〕

市川登井
つらつきに
似ぬをろかさや
慕

とうがらしはかぶを売て。うらだなへ引こむは」（女房）「とほうもない事をなさつた。こちの人がもどらんすと。しからしやんすがな」（繁）「イヤわつちが全くるきにあらず。此足めがとかくびん〜しよりまして。（上ノ十三ウ）をりふしは人さんの御きげんをそんじる事でござへすが。さて〜あしのいゝ子ぶるもこまりはてやす。しかし足とたらいとは随分相性はいゝが。なぜ又こんなそこがぬけたらう」（女房）「あほらしいあしとたらいに相性があるものか」（繁）「いやないともいへねへ。足がすりこ木の木性なら。鹽は扱（ママ）水の水性。たとへをとつていへばわれ（上ノ十四オ）なべに。とぢふたのりくつ」（昌）「なんとかみさん合点か〜」（女房）「をまいがたはたらいのそこを抜た上に。わしども茶にするのか。きかないぞ〜」（昌）「しかし茶に

するもだんぐがあつて。こび茶や土器茶は。当世のきもんだせアハ、ハ、ハ、トとある百姓のかとくち鎮西八郎為朝といへる表札があるゆへ昌「こはめづらしい保元平治のむかし。勇力をあらはせし。鎮西八(上ノ十四ウ)郎のすみかはこゝだな。なんと繁さんため朝大人を一寸尋よふか」繁「ヲ、サ尋ねなせ」昌「タノモ引ト」昌「はいると、内には年のころ六十斗」親仁「どなたじやな」昌「ハイわたくしどもは。為公におめにかゝりたくてあがりまして」親仁「ハア為なら今がた雪隠へいきをつたが」昌「ナニ先陣へいつた。定めし五人張を御持参で鎧は卯の花おどしであらうナト」昌「上ノ十五才」出来人あり「親仁」コレ為やどなたやらそなたにあひたいとて。御二人連にて御出なされた。おめにかゝりやト昌「はいは、かの男昌」男「ハイ私が為でムリ升ス」昌「これは大將はじめて拜面。まづ御けんごて珍重」昌「ぜんたいあなたはどなたまでムリ升スト」昌「はい、繁らに、あまりあは」繁「モシそつじながらあなたが為朝さまかな」男「いやわたくしは為介と申す者でムリ(上ノ十五ウ)升ス」昌「ナニ為朝公ではなかりしか」繁「ぜんたい真の為朝公は。先陣に御出なされたかな」男「いや為朝公といふような者は。わたくし方にはをりませんが」昌「しかるに又表札に鎮西八郎為朝と。おだしなすたのは。何らのゆへで」男「アハ、ハ、ハ、あれはこの方の小児めが。ほうそうのかるいやうに。咒にして置ましたのじやが。もし小さう書ては。痘(ママ)瘡の神の目にかゝらね(上ノ十六才)ば悪いとぞんじて。十分大きうかいて出してをきましたのじや」繁「なるほど夫でせしたはへ。いわれを聞は有かたや」昌「よく」聞ばなんともないト二人ははじめになり、半丁ばかりゆくと、安楽寺の天神ゆへ、天まん宮へさんけいなく、この境内にやうりやありて」茶やの女「をやすみナ」をしたくをなさりませトをたうべんと、二人はこゝにてひるめ」繁「なにか一寸したもんで。おまんまを二つと酒一調子くんない」女「ハイおとうふの八はいはどふでムリ(上ノ十六ウ)升スおでんもムリ升」昌「その八はいを。まづ一はいづゝ二人前のおくんな」繁「それに田楽を一はちくんないせ」女「ハイト人まへにゆき、やがてせんを二」繁「勝(ママ)負ト八はいのふ豆腐はやつぱりとうふにて。鯛のきりみにも変せぬとは。

はかないものだ昌「をたま杓子が蛙となるがあきれらアト二人は八ひけるが、繁八がすふ八はりの中」繁「かつをのだしかと思ふてしがんだが大それうかたいト」昌「よく」昌「エ、きたねへ爪のおれたをくはしやがつたト」昌「かんしよくを愛じて、すぐに口を茶にてあらふ、亭主」昌「さいせんわしが。かつを、かいたときから。小指の爪がおれてとんとゆくへがしれぬによつて。だんぐたづねていたが。かつをのだしにまぎれて。おまいさんの八はいの中へはいつたとは。おまいさまはよほど仕合ものじや」繁「このべらぼうめ。仕合ものとは。くそがきいてあきれらア」亭主「イエ(上ノ十七ウ)」昌「そのいわれをいわねばわからんが。去年の夏の事じやつたがさる御大名の若とのさまが。ちと愚ゆへなにをのましたかよからうと。御医者方におたづねのところ。それはかしこい人の爪をせんしてあげるがよいとを、せられた故。その御大名さまより段々かしこいものを御吟味のところ。まづ京中にて此親仁がかしこいとのうはさゆへ。わしへ(上ノ十八才)」昌「挿絵③(上ノ十八ウ・上ノ十九才)」昌「むけて。爪を奉るやうとおくせつけられ。一生涯五人ふちづゝあてがをふとのことなれど。おりふしそのころは皮膚がで、爪の入用なる時ゆへ。やむことをえずをこゝろを申ました」昌「このばんくるはせめが」亭主「サアそのくらい大切な爪じやによつて。さつきうしなふた時。どこへいたしらんとて大い尋ねた事ではない。そのつめがおまいの処へ(上ノ十九ウ)はいつたとは果報じやないか。よろこびのためさかづきてもするがよい」繁「ばかぬかしやがれまだしもうめが面をみねへさきは。そんなになかつたがそのつらを見てはなをさらたまらぬ」ア、胸がわるいべエ、ハ、ハ、昌「わつちも胸がわるくなつたべエ、ハ、ハ、ハ、」亭主「をむしにさはらば御了簡くたさりませト」出「亭主はまじめにあやまるゆへ、あたへをはらひを立、抑御室仁和寺(上ノ二十才)は。真言密乗の靈地にして。光孝天皇の御願所也。仁和四年八月にいとなみ給ふゆへ。仁和寺と申奉る。その莊嚴いふばかりなく。結構金を鏤め。いとも尊く又かしこし。折しも卯月のはじめなれば。繁八とりあへず

〔挿絵③（上ノ十八ウ・上ノ十九オ）〕



食^ヒ飯^メ飲^ミ酒^サ
曲^マ言^シ卷^ク線^ク
可^ヲ笑^シ亦^シ在^リ
其^ノ中^ニ 京鶴

龜遊 當[□] 山東京鶴
菱川師保 寸松堂 鳥丸三条
天[□] 林書勢 二十日

葉桜となつても花の御室かな

〔繁〕「サア昌さんこゝが大師堂だ。こゝろをこめてねんじなせへト
兩人は大師堂に 〔昌〕「なむ大師（上ノ二十ウ）遍照金剛。一ばん晒落の
をちをとるやう。いのらせ給へくト 山へとさしかへりぬ

四国栗毛上之巻終（上ノ二十一了オ）

山東京鶴の滑稽本『御室八十八ヶ所四国栗毛』

御室八十八ヶ所四国くりけ 下（大妻本原題簽）

御室八十八ヶ所四国栗毛下之巻

山東京鶴 戯作

諸も繁八昌六の二人は。いさみすゝんで御室山にいたるに。まことに都の絶景にして。その風色いふばかりなし。繁八昌六はまづ第一ばんの阿波のくに靈山寺といへるにさんけいなし。これより二ばんの極楽（下ノ一オ）寺へいたらんとする〇て、むかふへゆくは又（マ）術つかいとみへ歩みゆく。〔刃〕「をんなづれば道がはかどらないで。こまりいりやのきしほ神だ おやま 「わたしやモウしんどうてならぬわいな 刃「いますこし体をすへて。あるけばいゝにト 行けるを、繁八昌六はあ 〔繁〕「なんと昌公あはたしかに刃術つかいだが。なまぬけたやろうだ。妓をつれてきたこゝろが。馬鹿げきつてらア 昌（下ノ一ウ）「そふさ不便なやろうだ。ときにいゝなぞがでやした 〔繁〕「どうだきかせな 昌「けんじゅつつかひと。をやまとは。碁と将棋だは 〔繁〕「ム、こゝろはどうだ 昌「ハテ打ものと。さすものだてナ 〔繁〕「ハ、ハ、ハ、こりやとんちきた。わつちらアまたそうはとかない。是を長半の賽と双六の賽だは 昌「ハ、ハ、ハ、なげるとふるとの相違だらう。おさまらねへときかただぜ。しかし（下ノ二オ）おどけはやめにして。ものゝだぜ。刃術つかいはこへたがいゝが。おやまはやせたがこのもしいぜ 〔繁〕「そふさんんきはひねたがいゝなり。なすは花落がいゝようなもんさトこれより第三ばん金泉寺へ行けるに、この三ばんはいまだ御こんりうなくてたゞ印の木のみなり、そのしるしの木に、神社仏閣といふ札をおびたゝしくはつて、かの木の文字もろくゝわからぬくらい 昌「こゝはまだ御建立なしだナ 〔繁〕「もつたいねへことだが。かんそやみの代呂ものに藤丸のこうやくといふみたてだ。（下ノ二ウ）昌「それゆへの四国へんろう。ア、おへねへ 〔繁〕「をきやがれ。ばちがあたるもんだ 昌「なにおめへがさきにひかけたじやねへか 〔繁〕「ヲ、そふだつけ。みゆるし給へく 昌「をめへもはや手足をくそと小便の。あへものにしたことをわすれたか 〔繁〕「ナニわすれるもので。

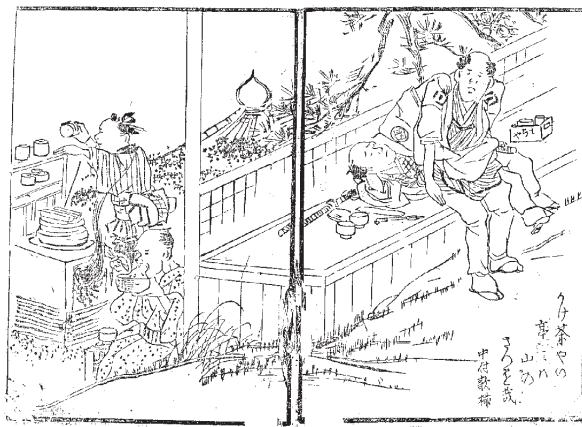
これより第九だいくばんの法輪寺ほうりんじといへるにもふでけるが。ねはんの釈迦しやくかによ如

〔挿絵④（下ノ三ウ・下ノ四才）〕



京屋いつ
遠くから
ゆひさししたり
花の山

来にて。涅槃ねはんの（下ノ五才）図をこと／＼木にて作りあるなり。繁「このねはんぞうは。画でみるとちがふて。一入尊いぜ。昌「しかしあの葉がふつてくるところばかりは。画でなくてはおさまらねへ。繁「ナニばんじ画よりは木でござんだがい。はナ昌「イヤそふもいへねへよ画空言といふではねへか。繁「エ、慶長時代の晒落はよしにしねへト。このたへ立たる、唐詩の五言絶句あり、二人はのちや（下ノ五才）所にてやすむ。○繁八この茶でみよふと思へど、とんとよめず、よめぬ文字、よめねばこの茶所。繁「ナニ越氏連城壁ゆめふかつたふかんとんあり。つぎ君遠雀白付。明月満前川。趙氏連城壁。由來。天丁伝。送三君還舊府。明月満前川。趙氏連城壁。由來。天下伝。送三君還舊府。明月満前川。趙氏連城壁。だな。ときに和尚さんこの十ばんめの切幡寺も。やはりあはの国かな和尚「ハイ。ばんから三十九ばんの寺山までが。阿波でムリ升ス（下ノ六才）繁「よし／＼それでしやれがうかみあがつたト。茶所の約をとりてこへして。繁「と、さんの名は阿波の十番めともふします。昌「ヲツト順れいに御報酬といつたらつけるぞ。繁「ハイさやうなら。四こくへんろうにおこ／＼ろざし。昌「でけた／＼アハ、／＼、ト。どつとわらふてこへる。のあたりより山上のかけ茶やみへてその景色いわんかたなし。繁「こりや奇妙だ／＼。昌「なんとはやくいつてばいい。きめるとは（下ノ六才）どうだ。繁「もちろんの事だト。一ばん藤井寺十二ばん焼山寺十三ばんの宮寺十四ばん常楽寺十五ばん国分寺へとさんけいなし。このかけ茶やのとこらまゐりたる、こは十六ばん井出寺のむかふなり。繁「昌六は松やといへば、茶やに入て昌「これあねさんなにか肴があらば。一調子くんなせへ。茶やの女「この御山のうちは。御酒や御肴はうる事は。なりません。繁「しからばなにかそへて。おまんまをくんなせへ。茶やの女「いやござんもつります事は。なりません。昌「ム、菓子はあるか。茶やの女「おくわし（下ノ七才）もうります事はなりません。昌「こりやまたとんちきだ。エ、なにもねへときいてなをさら。腹がきた山だはへト。昌六はへらうち。繁八はなにて／＼とんちやうをくいてるをうらめしきふにて／＼／＼とんちやうをとつて。繁「げんざいわりごを目にかけてくはずといふは何事ぞエ、しやうことがねへ昌さんいかふかト。これより十七ばん恩山寺十九ばん立江寺へとさんけいなし、二十ばんめ鶴林寺へいたる。これより京の町下へ。昌六さんけいの人に向ふて。昌「モに見るところなれば、さんけいの人お／＼立とまりてみてゐる。昌六さんけいの人に向ふて。昌「モシあの、どうが。ならんでみへるが寺町通かな。さんけい「さやうで（下ノ七才）ムリ升ス。繁「とて目にもみる町の内。とはとうだ。昌



山東京鶴の滑稽本『御室八十八ヶ所四国栗毛』

〔挿絵⑤（下ノ八ウ・下ノ九オ）〕

「わるいしやれだ。わつちがみたては。まづ家はしい葺に似て蔵はきりみのごとく。樹木はあをみと見へて。そらとぶとりを。すひ口とみるとはどうだ」**繁**「ばかぬかせ。京の町を菓子枕とは。まづい」**昌**「まづくともい。一わんくひてへ。大そうはらがちいさくなつた」これより二十一ばん大竜寺二十二ばん平等寺にもふできて二十三ばん薬師寺（下ノ八ウ・下ノ九オ）王寺にいたる。この下に岡山といふ小やまあり、名山なりすりばちをふせたるごとくみゆるのは

こゝもびぜんに名あるおかやま

これより二人は。二十四ばん東寺。二十五ばん津寺。二十六ばん西寺。二十七ばん神峰寺。としだいにさんけいなし。やがて二十八ばん大日寺。といへるへもふでけるが。この処より小倉つゝみ見へて。いとほれやかなるところ（下ノ九ウ）なれば。幸こゝのかけ茶屋にい

かけ茶やの
亭主は
山の
さつを哉
中村歌柳

つてやすむ。そのとなりに。真の江戸ッ子二人連にてやすみいる**江戸**「これかみさん茶をいま一つくんなせへト茶をのみながら、繁八昌六**江戸**「モシおめへかたも江戸でござへすかト真の江戸ッ子ゆへ、けどられまいとおもひ」**昌**「さよふさ**江戸**「わつちも江戸でござへすが。おめへがたはどの辺だナ**繁**「につぼん橋さ**江戸**「ナニにつぼんばしといつちや。江戸（下ノ十オ）にはねへ。にほんばしだらうトなりと思ひ、そろくせふりかけ**江戸**「こちらの御連はどの辺だナ**昌**「わつちやひものまちでござへや**江戸**「ハテナひものまちといふも。江戸にはねへ。ひもの丁だらうト子にけどられまいとて、わりに江戸ッ子をつかふ**昌**「さやうくしかしわつちどもは。とんかく上がったことばがならひたつて**江戸**「イヤこりやとんちきだ。ならひたつてとは（下ノ十ウ）おさまらねへ。おめへがたは江戸の衆ではねへはへ。定めし奥州辺だらう**繁**「イヤしんに生国関東なれども。あの男はこのごろひつてに鼻の工合がわるく。それゆへの四国でござへす。不便なやつだとおぼしめせト繁八はじぶんばかりとをうとするゆへ、昌六大に腹を立**昌**「ヤイ繁八をのれはいまア友達のよしみもないがきじや。そないにおれが事を。（下ノ十一オ）わるふいへば。これからわがことも。みな白状するのじや。モシ江戸のおかた。わしがいふことを一通りをききなされ。元来あのをともわたくしも。ひがしといふたらおかげまいりの坂むかひに。けあげまでさんじたばかりでムリ升けれど。兎角生れついて。きいた風がすきゆへ。かやうにはじをかきます。あのおとこの大小さいたも。元（下ノ十一ウ）が町人のことゆへ。あれごろうじませ。鼈の打首みたやうに。びつこくといいたし升ス不便なやつじやとをぼしめせト白状すると、繁八は大にみつかふとするを、江戸の男のあいさつにてやうくに申をり、こゝを立いつる**昌**「繁さんこれから又江戸ッ子だぜ。元来あんなに真の江戸ッ子がけつかるから。すでにおめへと絶交しようとした。ハ、ハ、ハ、時にこうだ

江戸ッ子はへどつこなるぞ我々を（下ノ十二オ）

くちからはいたごとくぬかした

これより二十九ばん国分寺。三十ばん一のみや。三十一ばん五台山。

とは。きんぜいでござります〔繁〕「こいつはとんちきだ。道成寺のう
らがきているわへ。なぜまた男は禁制でござへすナ〔和尚〕「ハテ女
の道かあるけいでおこまりなざるを。と〔下ノ十七オ〕めますは功徳
になりまするが。くつきやうな男のをかたをとめますは。なにも功
徳にもなりません。かへつてこの方の欲心のようにあたりますゆへき
んぜいと申あげましたのでり升ス〔繁〕「なるほどそのを、せ至極も
つともだ。実はつれの男が俄に目をいためて。こまりきつていやす
ゆへ。一宿をおたのみ申事だてナ。もしおとめなすつてくださる
〔下ノ十七ウ〕うなら。まことに莫大の功徳でござへす〔和尚〕「そんな
ら今宵はおとまりなされ愚僧は下の茶所まで用事があるから。幸の
ことじや。おまへかたにるすをたのんで。一寸出てまいりましよ。モ
シおつれのこちらへ。をはいりなされませト〔和尚〕は出て行、繁八昌ハは
足をはらふてうへ、あかる
〔繁〕「昌さん目はどうだ〔昌〕「でへぶよくなつてきやしたが。はらがま
ことにきた山だ。〔下ノ十八オ〕この和尚がはやくもどれば。茶づけ
なとふれまつてもうに。あやにくおせいぜ〔繁〕「ウン時にあれなる
はげびつではねへか。わつちは一寸ト〔昌〕「いひながら、かの飯櫃のふたをと
れ繁さんそのふたをとりなすな。またはちをかくもんだ。よしにしな
く〔繁〕「テモ天のたまものだは。はちをかいてもまゝの事よ〔昌〕「コ
レサおめへがそのげびつのふたをとつ〔下ノ十八ウ〕てはちをかい
しもふては。四国栗毛の二へん目の幕あきにねうちがねへはナ。あけ
てみぬさきの玉手ばこ。和尚がもどるまでまちなせへく

これより此げびつのふたをとりて。しげハ。はぢかきしおか
しみ。この茶所にて一宿の滑稽。さてまた五十三ばん。円明寺
くさりのだんの晒落より。近〔下ノ十九了オ〕江屋酒もりの
だんなど。ことくおもしろみを穿ちて。後へんにいだし
申候。何卒御評判よろしく御一らん。ひとへにく奉希上候

四国栗毛卷之下終（下ノ十九了ウ）